

竹下復興大臣記者会見録

(平成27年4月1日(水) 17:54~17:57 於) 東京・サントリーホール)

(問) 大臣、ただいまの御挨拶では感激されていたようですが。

(答) ちょっと詰まっしてしましまして、お恥ずかしいところをお見せをいたしました。ただ、私自身もブラスバンドやっていたものですから、あの子どもたちの思いみたいなものが伝わって大変感激しました。

(問) こういったイベント、今年3回目ということなんですけれども、こういったイベントが復興にどのようにつながっていけばいいと、大臣としてはお考えでしょうか。

(答) 子どもたちには、かなわないんですよ。彼らは東北の未来そのものであり、日本の未来そのものなんです。その若い人たちが、それは本当にさっき言ったように苦しかったろう、さびしかったろうと思いますが、ああやって力を合わせて物事をやるということ、もう何の世界でもいい、仕事でもいい、音楽でもいい、スポーツでもいい、人間ってなかなか一人じゃ生きられないということ、骨身にしみて分かっている彼らが、しかし力を合わせればいろんなことができるんだということを感じてくれればいいなど、こう思って復興に全力を尽くします。

(問) 「心にズシリと来ました」というお話がありましたけれども、特にいろいろあったと思いますが、彼ら、彼女らの姿を見て、本当に一番印象に残ったというのはそういう姿だったのでしょうか。

(答) もうそれは、さびしさとか苦しさをなかなか忘れてたり乗り越えたりはできないものなんです、しかし影も出さずにやっているいい姿だったですよ。

(問) 大臣自身も同じ音楽をされていたということですが。

(答) まあ昔やっていたんですけども。

(問) 何か通ずるものというのはあったのでしょうか。

(答) そうですね。いつもは演奏の大会、県大会ですとか全国大会とか目指してやるんですが、ああやって戦いじゃない音楽の演奏というのは、中高生にとってはめったにない機会ですので、その意味で非常に大きな意味があるんじゃないかなと、こう思いました。

(以 上)